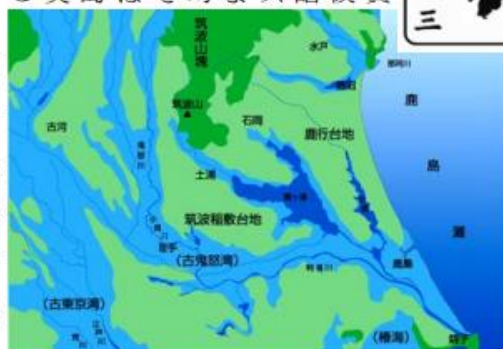


わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて
 ⑦ 歴史に学ぶ温暖化

案内役 田村哲三



縄文海進地図では、縄文時代は陸地の奥まで海だったことがわかる



縄文海進地図では、縄文時代は陸地の奥まで海だったことがわかる

昨年は真鍋淑郎博士のノーベル賞受賞に始まり、COP26(国連気候変動枠組条約第26回締約国会議)の略称など地球の温暖化、温室効果ガス削減目標などが大きな話題になりました。1850~1900年の平均気温と比較し、現在は1度上昇。その結果、熱波は2・8倍、干ばつは1・7倍、豪雨は1・3倍。南の島が水没に瀕し、熱波による森林火災や豪雨、洪水が世界的に起きてきていることも報道されています。さらに、現在より平均気温が2度上昇すると海水面が4~7m上昇するとも言われています。

平均気温2度の上昇は、前号まで述べて来た縄文時代中期と同じです。

縄文時代は温暖化により、東日本は住みやすい環境になりました。日本の人口の92%が住んでいました。定住や集団生活も進み、土器や土偶、衣類など新しい文化も生まれ、世界遺産の青森県の三内丸山遺跡や秋田県のストーンサークルなど東北北部では高度な文化が開花しています。

縄文人が住みやすかったのは、気温の上昇により、魚介類や木の実、獣などが身近で採れ、食料を得やすくなったからです。関東平野の低地部は水没してしまいました。また、西日本や南日本は温暖化でも住みやすい環境であったわけですが、6000年前の縄文時代を現代に置き換

〔出典〕

えるとどうなるでしょうか。

現在の関東平野の低地部は、縄文時代よりは高地ですが、それでも海拔4~5m地帯には海水がやってきました。多くの住居地や稲作地が海水に覆われ、河川の多くは消滅。つまり、生活基盤が大きく破壊され、さらに災害も多くなると考えられます。では住民はどうするか。

海岸線に海水の進入を防ぐ防潮堤の建設や排水対策が行われ、人々は北海道や長野県などに移住するなどが考えられますが、島国の日本に防潮堤を張り巡らすことや、数千万人もの人々が、北海道や高地に移住すること、さらに食料の確保。これらを考えるだけでも恐ろしくなります。

縄文時代の温暖化は自然現象ですが、現代の温暖化は人為によるものです。私たちは歴史に学び、世界や日本、身近なことから未来を考える時ではないかと思えます。

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて
 ⑧ 弥生時代

案内役 田村哲三



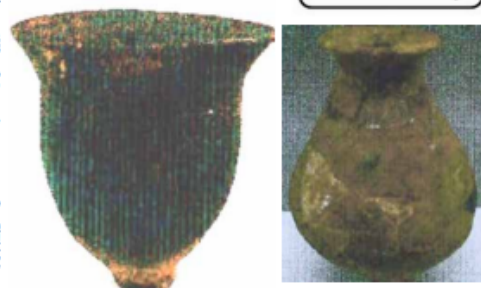
紀元前400年 紀元前300年頃を弥生時代と呼びますが、紀元前500年という説もあります。

縄文晩期から始まった寒冷化はその後進み、それまでの海の入江は淡水化された湿地帯に変わりました。魚介類がとれた海は、今度は稲作に適した地に変化し、北部九州で稲作が始まりました。稲作はやがて西日本、東日本へと広まります。現在の千葉県に稲作が伝わったのは弥生前期で、多くの遺跡から、中期には定着したものと考えられます。しかし、なぜか東葛地方には弥生時代の遺跡は多くありません。とくに流山市では現在のところ、下花輪荒井前遺跡と加村台遺跡、大群遺跡の3か所だけです。稲作に向かない土地柄だったのではとの説もありますが、定かではありません。

加村台遺跡は現在の市役所から博物館にいたる地で、「飛び地山」と呼ばれる標高17mの台地にありました。遺跡は約2000年前のもので、住居跡や弥生式土器の壺、甕(もたい)などが発見されました。石斧など弥生時代の石器も発見されましたが、鉄器や青銅器はありませんでした。鉄の国内生産は紀元前1世紀頃といわれますが、この地には伝わっていません。遺跡にはムラが営まれた形跡があり、環濠と思われる幅2m、深さ1・2mのV字形の

溝も発見されました。環濠はムラを防御するものではなく、村の境界を示すものと思われます。ただ、このムラも永く続かない一時的なものであったようです。では、いち早く稲作が始まった北部九州はどのようにあつたでしょうか。人びとが集団で生活するとムラができ、多くのムラがまとまることでクニができました。

弥生時代の遺跡として有名な吉野ヶ里遺跡は、紀元前4世紀ごろから人が住み始めたとき、1世紀には大きな環濠の集落(ムラ)クニに発展しました。3世紀には5400人が住んでいたと推定されています。環濠は敵からクニを守る防禦用でした。魏志倭人伝には「23世紀1人の倭国に30の国があり大乱が絶たず。その邪馬台国の卑弥呼をたて大乱を治めた」とあります。邪馬台国が九州か近畿かの論争は尽きませんが、同時代の流山と比べるとはるかに進んだ弥生文化がありました。弥生時代は縄文時代とは逆に、西高東低の時代でした。



加村台遺跡の出土壺と甕
 出典:ふるさと流山のあゆみ

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて

⑨ 古墳時代1
 三輪野山向原古墳
 案内役 田村哲三



紀元300年頃から700年の初め頃までを古墳時代と呼びます。弥生時代に稲作文化が進み人々が定住するようになるにつかのムラが生まれ、それを束ねる小さなクニができます。小さなクニはやがて大きなクニにまとめられ、権力者が現れます。それら権力者によって作られたのが古墳と呼ばれる墓です。



向原古墳

この古墳からは、流山とみよしの土器、土師器、銅器、鉄器、石器等の出土品が豊富に出ています。



3世紀後半になると九州、近畿地方に大きな前方後円墳が作られるようになり、古墳文化は稲作文化を追うように千葉県へも伝播され、3世紀後半になると手賀沼周辺で方墳が造られ、4世紀には流山最古の古墳である三輪野山向原古墳が造られました。古墳文化は西から海路で伝わったと考えられますが、流山には当時の内海であった手賀沼から大堀川を経て伝わったと考えられます。

古墳が作られたことは、周辺の人々が住む集落(ムラ)があったと考えられます。古墳近くの市野谷と西初石5丁目、116軒、三輪野山で106軒の住居跡(3世紀後半〜5世紀前半)が発掘調査で確認されたことから、これらのムラが関係していたと考えられます。

ムラを形成維持するには米が作れる低湿地が必要ですが、当時は治水の方法や土木技術もなく、米を作ることに適した湿地は限られていました。河川近くは増水や漏水に左右さ

れ適地とはいえません。その点、河川から遠く離れた、かつて海の入江だった谷津は稲作に適していました。谷津には周辺の台地からの湧水が流れ込みますから開口部を閉じれば容易に利水ができたのです。三輪野山周辺にはこうした谷津があったので、ムラが形成されたものと思われ、ムラは3世紀後半から5世紀前半まで続き、三輪野山向原古墳はその集落の首長の墳墓と考えられます。古墳は集落に囲まれた中央の台地にありました。集落の人々の目につきやすい台地に築いたことは、大きな墳墓によって権威や威光を誇示したのでしょうか。なお、三輪野山向原古墳は、周溝を含め1辺22mの方墳で高さは約1.5m。前方後円墳や前方後方墳など大型の古墳に比べ小ぶりですが、序列的には下位に位置していました。副葬品には鉄剣やガラス玉がありました。ヤマト王権では前方後円墳を頂点に墳墓の形や大きさで全国の勢力の序列化が進んだ時代でした。

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて

⑩ 古墳時代2
 三本末古墳
 案内役 田村哲三



鯉ヶ崎駅から北に7分ほどの高台に鯉ヶ崎4号公園があります。ここはかつて、鯉ヶ崎三本末古墳があった地。周辺の地区整備計画に伴い、発掘調査のあと公園として生まれ変わりました。

三本末古墳は市内最大の前方後円墳でした。当初の調査では全長25m、後円部径17m、前方最大幅8m、後円部と台地平坦部との比高2.5mとされていましたが、最終調査では、全長40mと推測されました。北側の台地からは周溝跡も発見されましたが、前方部や古墳外郭全体が既に破壊されており、実態は不明のままです。円筒や埴輪、人物像、形象埴輪などの出土品から古墳時代後期の6世紀後半の古墳と考えられます。

前号で述べたように、前方後円墳は円墳や方墳に比べ格式が高いと考えられています。流山市域に他に類がないことは、かなりの実力者がいた証拠とも言えます。また、40mにも及ぶ古墳の造営を考えると、周辺には良好な稲作地とムラが存在していたと考えられます。

後円部には下総國鯉ヶ崎郡古家碑と稲荷社が祀られていました。碑は文政11年(1828)の建立で、流山市の有形文化財に指定されています。碑文を要約すると

「天明の飢饉のとき、困窮した村人が古墳は貴人の墓であるから宝物が



鯉ヶ崎8号緑地横の稲荷社

4号公園高台に碑は鎮座している

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて
 ⑪ 古墳時代3
 東深井古墳群
 案内役 田村哲三



森の図書館に隣接した東深井地区公園(通称・古墳の森公園)には沢山の古墳があります。かつては19基確認されましたが、現存するのは13基です。周辺には八幡山古墳群(柏市)や三ヶ尾古墳群(野田市)などもあったことから、いくつかの豪族がいたと考えられますが、住居跡は特定されていません。

古墳文化は大化の改新時に制定された薄葬令により、7世紀の終わり頃には廃れたとされています。

東深井古墳群は直径10〜12m、高さ1〜2mの円墳で、その中の1基は、方墳の小さいホタテ型の前方後円墳です。6世紀後半から7世紀初めに、連続して築造されたと考えられています。

副葬品には直刀、鹿角装刀子、鉄鎌(やしり)、ガラス玉、埴輪などがありました。埴輪では円筒や家形埴輪、武人や貴人、婦人などの人物埴輪、馬、鶏、魚などの動物埴輪などがありました。

魚形埴輪は、円筒形の台の上に魚が乗ったもので、尾鰭や尻鰭もあり、口とエラも線刻されている珍しいものです。鮭と推測されることから周辺の水辺には鮭が遡上していたのかもしれない。

鶏形の埴輪の出土は、人々が鶏を大切にしてきたことの表われともいえます。鶏はいち早く夜明けを知ら

せてくれることから、人びとの生活になくてはならない鳥でした。鶏形埴輪が副葬されたことは、暗い土の中に埋葬された死者が、夜明けも知らずにいるのは可哀そうとの思いからだったのでしょうか。

本紙8月号でも紹介しましたが、古墳のできた背景には、近くに米作りのできるムラが存在したと考えられます。東深井古墳群を築造したムラはどこにあったのか。6世紀後半ごろの住居跡の発見が待たれるところです。

市内の古墳は本誌であげた3例以外に中野久木や初石、加などにもありましたが現在は消滅しております。現存する古墳では、北部中学校西側(中野久木)に円墳があります。



魚形埴輪



鶏形の埴輪

出典:ふるさと流山のあゆみ

わがまち・ふるさと再発見!
 流山のむかしを訪ねて
 ⑫ 奈良・平安時代の集落
 案内役 田村哲三

天皇を中心とした中央集権の国家体制は、7世紀の後半頃にはできあがります。

701年、大宝律令が完成。地方には国、郡、里(50戸)が置かれ、里は717年以降「郷」に変わり、里は郷の下部になりました。国守は中央から派遣されましたが、郡司や里長は地方の豪族が任命されました。

全国は畿内道、東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道、西海道の7道に分けられ、東海道の東端は常陸国でその手前が下総国でした。下総国の国府(役所)は市川市国府台にありました。下総国は11郡あり、流山が属した葛飾郡には8郷がありました。流山がどの郷なのかは分かっています。

この時代、流山の集落はどのようなものでしょうか。これまで紹介してきた三輪野山貝塚遺跡、加村台遺跡、三輪野山向原古墳、三本松古墳などは三輪野山から鶴ヶ崎に至る台地上にありました。この台地では他にも多くの遺跡が発掘され、その中に、加の町畑遺跡があります。

町畑遺跡は6世紀前半から10世紀まで約500年も続いた集落で、古墳時代後期の建物跡74棟、



律令時の下総国

奈良・平安時代の建物跡126棟などが発掘されました。ただこれらの建物跡は同時代のもではなく、増減を繰り返しながら変遷していったものと思われれます。

出土品には奈良時代の通銭「神功開宝」があり、畿内からもたらされたものでしょう。また、田、井、井道、賀由比、大などと言われた墨書土器もあり、文化的交流も盛んであったようです。

三輪野山宮前遺跡出土瓦



加村町畑遺跡墨書土器

海を渡り上総国府から成田方面に出て常陸に向かっていたが、その後、下総国府から安孫子、布佐を経て常陸に至る道筋に変わりました。なお、他にも遺跡は発掘されていますので博物館にお尋ねください。
 (写真出典:ふるさと流山のあゆみ)